*Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University*
2012, Vol.22, 165-174

論 文

# 新・学習指導要領に基づいた英語授業の実践
## －小学校外国語活動と表現力（Speaking）を中心として－

山　内　　誠〔鹿児島大学教育学部附属中学校〕・有　馬　綾　一〔鹿児島大学教育学部附属中学校〕
入　江　将　紀〔鹿児島大学教育学部附属中学校〕・池　本　源二郎〔鹿児島大学教育学部附属中学校〕

**Study of English education based on new Course of Study: Focusing on foreign language activities in elementary school and lessons of speaking in junior high school**

YAMAUCHI Makoto・ARIMA Ryoichi・IRIE Masanori・IKEMOTO Genjiro

キーワード：小中連携、語彙指導、４技能統合、言語活動、習得と活用

## 1　緒言

本研究は，2012年度全面実施の新・学習指導要領（中学校　外国語）に基づいて，小学校外国語活動を踏まえた中学校第一学年の導入期の授業，及び，表現力の中のspeakingを重視した中学校第三学年の発展期の授業の在り方を考察する。特に，平成24年度５月に本校において研究公開した授業を中心にして第一学年と第三学年の二つの授業計画立案に至った経緯や実際の授業において我々が取り組んだ内容，成果，さらに今後の課題などにも言及する実践的研究である。

## 2　外国語科の学習指導要領改訂のポイント

### (1)　４技能の総合的な育成

平成10年12月告示の中学校学習指導要領（以下「旧学習指導要領」）の外国語科の目標では，中学校段階において，特に「聞くこと」「話すこと」を重視することが求められてきた。しかし，今回の改訂では，小学校段階での外国語活動を通じて，音声面を中心としたコミュニケーション能力の素地が育成されることになった。このことを踏まえ，「読むこと」「書くこと」の指導の充実を図ることになった。また，自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力，内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視することになった。このような観点から，「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について，自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し，「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう，４技能，つまり「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の総合的な（バランスのよい）指導を通して，これらの４技能を統合的に（２技能以上を組み合わせて）活用できるコミュニケーション能力を育成する必要がある。また，その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとして捉え，文法指導を言語活動と一体的に行うことが求められる。

### (2)　小学校における外国語活動の導入

平成10年12月に告示された小学校学習指導要領から，「総合的な学習の時間」が設けられた。

学習指導要領の総則において，「総合的な学習の時間」の取り扱いの項目として，「国際理解に関する学習の一貫として外国語会話等を行うときは，学校の実態等に応じ，児童が外国語に触れたり，外国の生活や文化に慣れ親しんだりするなどの小学校段階にふさわしい体験的な学習が広く行われるようにすること」と示され，英語活動を行うことが可能となった。しかし，今回の改訂で，「外国語活動」が新設され，小学校５・６年生に導入されることとなり，平成24年度以降中学校に入学する生徒は，５・６年次において年間35時間の外国語活動を経験していることになる。

小学校における外国語活動の目標は，「外

国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う」（小学校学習指導要領解説　外国語活動編　平成20年８月）ことである。コミュニケーション能力の素地とは，小学校段階で外国語活動を通して養われる，①言語や文化に対する体験的な理解，②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度，③外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものである。これらは，中・高等学校の外国語科で目指すコミュニケーション能力を支えるものであり，中学校における外国語科への円滑な移行を図る観点から，目標を支える三つの柱として明示されている。これらのことから，小学校外国語活動においては，音声や基本的な表現の習得に偏重して指導したり，「聞くことができること」や「話すことができること」など，技能の向上のみを目標とした指導が行われたりしているのではないことが分かる。このことを理解したうえで，中学校における外国語を指導する必要がある。

**(3) 言語活動の充実**

学習指導要領の「２内容(1)言語活動」については，その意図することは大きくは変わらないが，４技能それぞれについて，四つずつあった項目を表１のように追加もしくは再編成し，各５項目としている。

今回付け加えられた項目を見ると，「まとまりのある英語を聞いて，概要や要点を適切に聞き取る」「テーマについて簡単なスピーチをする」「書かれた内容や考え方などを捉える」「文と文のつながりなどに注意して文章を書く」など，４技能全てにおいて，文単位でなく，文章としてのまとまりを意識しての指導が求められていることが分かる。従って，まとまりのある文章を理解したり，まとまりのある文章で表現したりすることができるよう，言語活動の充実を図る必要がある。

言語活動の充実は，今回の学習指導要領の改訂を通して，重視されている。特に，外国語である英語を扱うという教科の特性から，習得や活用をめざした言語活動の充実を図ることは重要である。なぜなら，英語科においては，英語を用いた言語活動を通して，言語材料を習得，活用できるようにさせることが，生徒にコミュニケーション能力を身に付けさせることにつながり，コミュニケーション能力の基礎を育成するという学習指導要領の目標を達成することにつながるからである。

**(4) 言語材料の充実**

「語，連語及び慣用表現」については，今回の改訂により，指導する語の総数は「1200語程度」とされた。これまでは「900語程度まで」とされていたので，300語程度増える

**表１【言語活動の追加・再編成事項】**

| | |
|---|---|
| 聞くこと | 【追加】<br>・　まとまりのある英語を聞いて，概要や要点を適切に聞き取ること。 |
| 話すこと | 【追加】<br>・　与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。 |
| 読むこと | 【追加】<br>・　話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり，賛否やその理由を示したりなどすることができるよう，書かれた内容や考え方などを捉えること。 |
| 書くこと | 【これまでの（ウ）と（エ）を再編成】<br>・　語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。<br>・　身近な場面における出来事や体験したことなどについて，自分の考えや気持ちを書くこと。<br>・　自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように，文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。 |

ことになる。これは，より豊かな表現を可能にし，コミュニケーションを内容的にもより充実させるためには語数の増加が必要と考えたことによるものである。また，語数の増加は，増加した語彙を活用し得る言語活動の充実と切り離して考えることはできないものであり，授業時数が「年間105時間」から「140時間」に増加したことで，生徒に過度の負担をかけることなく，言語活動をより充実させていくことが求められる。

「文法事項」については，これまでの学習指導要領で用いられていた「文型」に替えて「文構造」という用語を用いた。文を「文型」という型によって分類するような指導に陥らないように配慮し，また，文の構造自体に目を向けることを意図してより広い意味としての「文構造」を用いたものである。なお，指導事項の更なる定着を図るため，文法事項の指導内容は概ね従来のままとしており，新たな指導事項の追加はほとんど行っていない。

「言語材料の取り扱い」においては，旧学習指導要領では，次の三つの文法事項については，「理解の段階にとどめること」とされていた。

○　主語＋動詞＋whatなどで始まる節
○　主語＋動詞＋間接目的語＋how（など）to不定詞
○　関係代名詞のうち，主格のthat，which，who及び目的格のthat，whichの制限的用法の基本的なもの

しかし，今回の改訂では，その「はどめ規定」がなくなくなり，これらの事項についても生徒が表現できる段階まで，高める指導を行うこととされた。このことにより，各学校がそれぞれ創意工夫を生かした特色ある授業を実施できるようになった。また，今回の改訂では，言語材料の取り扱いについては，以下の項目が新たに加えられた。

○　発音と綴りとを関連付けて指導すること。
○　文法については，コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ，言語活動と効果的に関連付けて指導すること。
○　語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。
○　英語の特質を理解させるために，関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど，効果的な指導ができるように工夫すること。

このような学習指導要領の特徴から，生徒がコミュニケーションを図る上で必要な，基本的な語彙や文法事項を，言語活動を繰り返し行うことによって身に付けること，そして，中学校３年間で自分の考えなどを相手に伝えたり，相手の意向などを理解することができるコミュニケーション能力を身に付けたりすること等が重視されていることが分かる。このような学習指導要領の改訂に基づいて本学，鹿児島大学附属中学校英語科においては，小学校外国語活動を経験してきた中学校入門期の英語授業，さらに中学校三年の発展期における表現力，特にspeakingの授業に取り組んだ。それらの二つの授業をそれぞれ，以下に考察する。

## 3　英語科の授業づくりの考え方

これまで，本校では「習得」と「活用」に基づく学習サイクルの中で，「コミュニケーションを楽しむ生徒の姿」をめざしてきた。その成果として，生徒はあらかじめ準備した表現でなく，状況に応じて英語を話そうとするなどしてコミュニケーションを楽しむ姿が見られた。しかし，言語活動の途中でつまずいてしまったとき，なぜうまくいかなかったのかという問題点や課題を探り，それらを主体的に解決しようという意欲に欠けていたり，知識として身に付けたことをその場では理解していても，別の場面

で，十分に活用することができなかったりという課題も残った。そこで，『自ら考え，英語でよりよく理解・表現しようとする生徒』の育成をめざし，研究実践を進めてきた。「自ら考える」姿とは，様々な言語活動の場面でつまずいてしまったときに，すぐに諦めたり他者に頼ったりするのではなく，まずは自分で理解・表現できなかった原因に目を向け，その解決方法を深く考え，つまずきを乗り越えようとすることである。次に，「よりよく表現する」とは，１時間の授業の中で習得した言語材料だけではなく，既習の言語材料も活用しながら，自分の考えなどを工夫して表現することであると捉えた。また，「よりよく理解する」姿とは，単に内容を聞き取ったり読み取ったりして理解するのではなく，その後の活動において活用するために，相手の意向や大切な情報などを主体的に聞き取ったり，読み取ったりするといったことを示している。

## 4　本校英語科で生徒に身に付けさせたい力

「自ら考える」生徒を育成するためには，英語を理解・表現できなかった原因に目を向け，その解決方法を深く考えながら，コミュニケーションにおけるつまずきを自ら越えられるようにさせることが大切である。そこで，問題解決的な学習の展開を通して，つまずきを乗り越えようとする態度を身に付けさせたいと考えた。

英語で「よりよく理解・表現」する生徒を育成するためには，習得した基本的な語彙や文構造をコミュニケーションの中で十分に活用させることが重要である。「習得した言語材料を活用する」というのが，基本的な「習得」と「活用」の関係である。しかし，言語材料を活用してみることで，言語材料の習得が深まることもある。また，習得が深まることによって，よりよく言語材料が活用されるようになることもある。つまり，「習得」と「活用」はお互いに関連し合っていると捉え，両者をバランスよく行いながらそれぞれの力を高めていくことが重要なのである。そこで，「言語材料を習得する学習」と「言語材料を活用する学習」とを効果的に結び付け，「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の４技能を統合した言語活動を工夫する中で，「英語を理解する力」と「英語で表現する力」を高めたいと考えた。

なお，身に付けさせたい力の一つとして先に述べた「英語を理解する力」とは，聞き手や読み手として，主体的に理解する力のことである。つまり，理解した内容を基に，英語で表現することや，実際に行動することにつなげられるように，理解していく力のことである。また，「英語で表現する力」とは，様々な活用場面で，これまでに習得してきた言語材料を思い出し，自分なりに工夫して活用する力のことである。

## 5　英語科の授業づくりのポイント

### (1) 英語科の言語活動

#### ア　言語材料を習得させる学習

本校英語科では，これまで，言語材料を理解し，練習する学習を，英語における「習得の学習」と捉え，授業の工夫を行ってきた。これらを通して，生徒は一つ一つの言語材料の形や意味を理解し，パタンプラクティスやそれらを用いた簡単な言語活動を行うことで，言語材料を習得してきた。しかし，個々の言語材料を他の言語材料と関連付けながら，まとまりをもって整理をするまでには至らないことも多かった。そのため，実際に互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際，どの言語材料を用いるのかを的確に判断したり，習得した言語材料を正しく活用したりすることが十分にできていなかった。そこで，以下のように，まとまりをもって整理しながら，習得できるようにした。

#### イ　文法事項をまとまりをもって整理させる工夫

言語材料についての気付きを促す方法を工夫し，生徒が，授業で接する英語から，言語材料をまとまりをもって整理できるようにする。具体的には，生徒がそれまでに学んだ個々の言語材料の共通点や相違点に

気付き，より大きなまとまりとして言語材料を整理できるような，言語材料のまとめの場面を設定する。そのためには，まず，まとまりをもって整理させたい文法事項等を含む英語を，生徒がこれまでに接したものの中から複数選び出す。その際，生徒が自らの力で，それぞれの共通点や相違点を明らかにできるよう，選び出す英語の難易度や量を生徒の実態に合わせて調整する。次に，生徒に「語順」「動詞の形」といった視点をもたせたうえで，それらの英語を分類させ，最後に，それらのことから分かったことを言葉や図でまとめさせる（図１参照)。

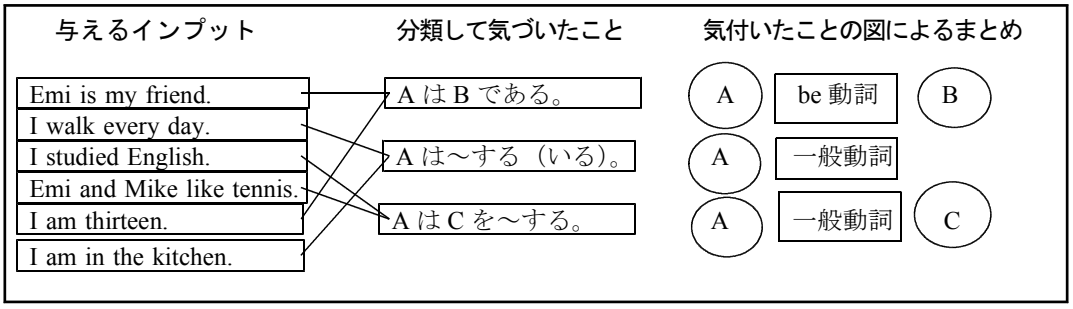
**ウ　語・連語及び慣用表現をまとまりをもって整理させる工夫**

影浦（2009）は，語彙力について「その語がどういう語と結び付くかについての知識があると，表現する際に便利である。」と述べている。例えば，kitchenであれば，「台所」という意味を知っているだけでなく，“eat in the kitchen” や “go into the kitchen”といった結び付きについての知識があれば，よりその語を活用して表現しやすくなる。

このような語と語のつながりは「コロケーション」として，辞書等にもまとめられている。コロケーションについて，“Oxford Collocations Dictionary for students of English”では，その冒頭において次のように説明されている。“Collocation is the way words combine in a language to produce natural-sounding speech and writing.”つまり，語と語のつながりを意識することで，よりその語を活用しやすくなると共に，自分の伝えたい内容をよりよく表現できるようになると考えられる。

そこで，次のような工夫を言語活動に取り入れることで，生徒が英語で表現する際に活用しやすい形で語彙を習得していけるようにする。

【語・連語及び慣用表現をまとまりをもって整理させる工夫】
① 新出の語彙を提示する際に，語と語のつながり等を意識させる。
② 言語活動の中で，語と語のつながり等を意識させる。
③ 辞書指導によって，語と語のつながり等を生徒自ら調べられるようにさせる。




［３つの文型を学んだ１年生に，「文の形］をまとまりをもって整理させるためのまとめの場面］
・ 与える情報は，教科書で学んだものを中心に，生徒が理解可能なものとする。
・ 「文の形が同じものでペアを作ろう。」といった発問で視点をもたせ，情報を分類させる。
・ 分類して分かったことを言葉や図でまとめさせる。

**図１【文法事項における整理の例】**

①は，新出の語彙を提示し，練習する言語活動など，②は，生徒と教師のインタラクションを図る言語活動など，③は，生徒が自分の考えなどを英語で書いたり話したりする言語活動などにおける工夫である。

例えば，①フラッシュカードの中に“morning”だけでなく，“in the morning”というカードも加えて発音練習をする，②教師の“Where do you live?”という質問に“Korimoto.”と生徒が答えた場合，“In Korimoto? Me, too.”などと言い換えることで意識させる，③「映画を見る」の「見る」を辞書で引き，watch，see，lookの内どれを用いるべきか迷っている生徒に対し，「映画」という言葉で調べるよう助言する，といったことが考えられる。また，このような語と語のつながりの他に，同意語や反意語，似た意味をもつ語のまとまり等，個々の語だけでなく，他の語との関係などにも着目しながら，より活用しやすい形で語彙を習得していけるようにすることも大切である。

**(2) 言語材料を活用させる学習**

本校英語科では，これまで，実際に英語で情報を伝え合ったり，互いの気持ちや考えを表現し合ったりする言語活動を「タスク」とし，毎時に行うsmall tasksと単元を貫くlarge taskの２種類を開発し，実践してきた。しかし，本校英語科がめざす生徒を育成するためには，それらのタスクだけでは十分ではなかった。なぜなら，large taskの中で，その単元で学んだ言語材料を活用することはできても，その単元以前に学んだ言語材料を活用することに関しては，十分にできているとは言えなかったからである。そこで，large taskの準備段階としてmiddle taskを加え，３つのタスクを中心とした授業を展開することにした。それぞれのタスクの内容は表２の通りである。

なお，このようなタスクを設定する際には，４技能を統合した言語活動を取り入れられるようにする。本校英語科においては，４技能を統合した言語活動を，岡・赤池・酒井（2004）の示した図を基にして，４技能を統合した言語活動とは「聞くこと」「書くこと」「読むこと」「話すこと」というように，二つ以上の技能を組み合わせた言語活動であると定義している（図２参照）。

具体的には，次に示すような工夫をmiddle task やlarge taskに取り入れることで，「英語を理解する力」や「英語で表現する力」を高められるようにした。

**ア　言語材料を自分なりに工夫して活用させる言語活動の工夫**

large taskにおいては，既習の言語材料を十分に活用しながら互いの気持ちや考えなどを理解・表現できるようにさせたい。しかし，自分の表現したい内容と，既習の言語材料がすぐには結び付かない場合がある。例えば，次のような場合がある。

**表２【本校における３つのタスク】**

| タスク | 目　　的 | タスクの例・生徒に活用させる表現等 |
|---|---|---|
| small tasks | 新出の言語材料の意味や用法を理解したり，練習したりするための言語活動 | small task：「各県の観光名所クイズをしよう。」<br>・Can you see Himeji-jo in Hyogo? |
| middle task | 本時以前に学んだ言語材料等をlarge taskで活用できるようにするための言語活動 | middle task：「日本の観光地を紹介しよう。」<br>・Fall is a good season. So come to Kyoto in fall. |
| large task | 自ら集めた情報等を基に，これまでに学んだ表現等を活用して理解，表現する言語活動 | large task：「鹿児島の観光地を紹介しよう。」<br>・Look at this big radish. It’s Sakurajima-daikon. You can eat it in winter. So come to Sakurajima in winter. |

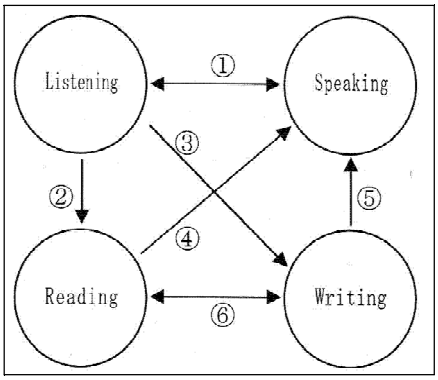



図２　４技術を統合した言語活動の種類
岡・赤池・酒井（2004）

①「相手の意見への賛成，反対を述べる。」
②「スピーチの聞き取れなかった部分を原稿で確認する。」
③「スピーチの概要を書き取る。」
④「読んで調べたものを発表する。」
⑤「スピーチの原稿を書いて発表する。」
⑥「受け取った手紙を読み，返事を書く。」

４技能を統合した言語活動の例

〇金閣の所在地は京都だと言いたい。
↓
「所在地」がわからないから表現できない。

実際には，“Our school is in Kagoshima.”などの既習の言語材料を活用すれば，“Kinkaku is in Kyoto.”と表現することができるが，そのことに気付かずにあきらめてしまうことがある。そこで，生徒が英語で表現する際に有効な工夫（工夫Ａ～Ｃ）を身に付けさせられるような言語活動を，middle taskの中に取り入れることにした。

工夫A：日本語における主語の省略に気付き，自ら適切な主語を補う。
工夫B：SVCからSVに文構造を変えて考える。
工夫C：２文以上の文に分けたり，適切から接続詞等を用いたりする。

具体的には，図３のようなメモを基に表現する活動を行う。

**イ　主体的に考えながら理解させる言語活動の工夫**

生徒の聞き手や読み手としての主体的な態度を引き出すためには，聞き取ったり読み取ったりした内容が，その後の活動において活用されることが大切である。そこで，理解した内容を基に，英語で表現することや，実際に行動することにつなげられるように，以下のように言語活動を工夫することで，生徒の主体的な態度を引き出せるようにした。

**【主体的に考えながら理解させる言語活動の工夫】**
①　生徒が聞いたり読んだりする内容に「依頼」や「質問」等が含まれるようにする。

金閣寺基本情報
(1)　建立年は，約６００年前
(2)　建立地は，京都
(3)　秋には，美しい金閣が見られる
(4)　京都では，舞妓さんが見られる
(5)　おすすめは，金閣チョコ

「工夫Ｂ」を用いれば，「建立地は京都」を「それは京都にある。」と考え“It's in Kyoto.” など，これまでに学んだ言語材料等で表現できる。

「工夫Ａ」を用いれば，主語が省略されている事に気付き，“You can see *maikosan* in Kyoto.” など，主語を補って表現できる。

「工夫Ｃ」を用いれば，“Kinkaku chocolate is very good. So eat it in Kyoto.” など，連結詞を活用して表現できる。

図３【middle taskに用いるメモとその工夫】

② 聞いたり読んだりする際は，大切な内容のメモを取ったり大切な部分に線を引いたりさせることで，自分がどのように読み取ったかが分かるようにさせる。
③ メモの内容や，線の引かれた場所を基に，ペアやグループで話し合わせ，自分に足りなかった視点については，色を変えて書き加えさせる。
④ 最後に，メモや下線を基に，書いたり話したり行動したりすることを通して，相手の意向に応えさせる。

図４は，実際の言語活動に用いた手紙文とその工夫の例である。

【活動の手順】
① 生徒個々で手紙を読ませ，ALTの返事に書くべき内きな容を大まかに捉えさせる。
② 適切に応じるために大切な部分に線を引きながら再度手紙を読ませる。
③ 線を引いた場所や返事に書く内容についてグループで意見交換させる。
④ 話し合いを基に自分の考えをまとめ，返事の手紙を書く。

## 6　小学校における外国語活動との接続を意識した授業づくりの工夫

中学校における英語の入門期においては，特に小学校外国語活動との接続を意識した授業づくりが　求められる。小学校外国語活動における目標は，次の三つの柱から成り立っている。

【小学校外国語活動における目標の三つの柱】
① 外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深める。
② 外国語を通じて，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
③ 外国語を通じて，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

December 13th

Dear my students,

It's my wife's birthday on next Saturday. We're free on that day. So I'm going to see a movie with my wife. After that we will go shopping in the afternoon. Then what movie should we see?

My wife and I both like adventure movies the best. My favorite movie is Indiana Jones. We like exciting movies. I saw Robin Hood last week. It was very exciting.

My wife is a big fan of SMAP. She loves Kimutaku very much.

We don't like love stories. Of course they are moving but it's not so exciting for us.

White me soon.

Sincerely yours,

Nick

【主体的に考えながら理解させる工夫】

ALT からの「質問（下線部）を含む手紙である。生徒はこの「質問」に応じる返事を書く。
返事を書くためには，以下の条件を読み取る必要がある。

映画を選ぶ条件（下線部）
時間帯　：午前中に見ることができる映画
ジャンル：二人が好きなのはアドベンチャー
　　わくわくする内容の映画
　　ロビンフッドは既に見ている
　　二人ともラブストーリーは好まない
その他　：奥さんの誕生日
　　奥さんは「キムタク」が好き

※　５つの映画の上映時間，ジャンル，キャストなどが分かるワークシートを別に用意し，その中から条件に合うものを選んで返事が書けるようにした。

**図４【言語活動に用いた手紙とその工夫】**

中学校英語との大きな違いは，体験的に理解することや，音声に慣れ親しませることを重視している点である。一方で，コミュニケーションへの積極的な態度については，小学校・中学校で共通して育むべきものとしてあげられる。そこで，中学校における英語の入門期の授業づくりにおいては，次のような点を工夫して授業づくりを行う。

**【中学校における英語の入門期における授業づくりの工夫】**

**1　事前**

①　外国語活動の授業を参観し，児童の様子を把握する。

②　使用されている教材・教具や活動，言語材料等について事前に把握する。

**2　導入**

①　外国語活動で慣れ親しんだ教材・教具を共有することで，外国語活動での取組を想起させ，安心感を与える。

②　Warm Up などの活動では，本時の展開との関連を考えながら，外国語活動で取り組んできたキーワードゲーム等（国名，職業など）を積極的に取り入れることで，学習への意欲を高める。

③　写真や実物，実際の動作などを見ながら英語を聞くことで，生徒が言語材料等の意味や働きを捉えられるようにする。

**3　展開**

①　２－③でとらえた内容を活用し，実際に話すことを通して表現することで，体験的に理解を深められるようにする。

②　文字や文法的な内容については，体験による理解が十分に深まるまでは提示せず，音声からの理解を意識し，生徒に文字や文法への抵抗を感じさせないようにする。

③　視覚教材やジェスチャー等を用いながら，積極的にクラスルームイングリッシュを使用し，体験的に理解する経験を深める。

**4　終末**

①　十分な言語活動の後，本時の新出語句や文法事項について振り返ることで定着を図る。

②　ノートの取り方については，必要に応じて，板書した基本表現を書き写させる程度に留めることで，文字への苦手意識をもたせないようにする。

**5　事後**

①　入門期における評価については，音声面に重点を置いた指導を行ったことを十分に考慮して行う。

②　定期テストの内容や配点については次のような工夫を行う。

・　「聞くこと」「話すこと」の配点を増やす。

・　「読むこと」「書くこと」については，語群や選択肢を与えるなどして，徐々に文字に慣れていけるようにする。

**6　その他**

①　失敗を恐れずに発表することができるような雰囲気づくりに努める。

②　アイコンタクトやジェスチャーなど，外国語活動で培ったコミュニケーションへの積極的な態度を維持できるように配慮する。

## 7　実践授業を通しての成果と課題

### (1) 実践授業（１年生）

【成　果】

・　小学校での外国語活動で慣れ親しんだ表現や活動を取り入れることで，モチベーションを維持しながら，中学校の英語の授業へ円滑に接続することができた。

・　文字に対し，難しい印象をもつ反面，自分で英語を書いてみたいという意欲が強い生徒が多く，文字の導入を慎重に，かつ丁寧に行うことで，その意欲を維持しつつ，つまずきを少なくすることができた。

・　連語や類義語等を踏まえながら語彙指導することで，語彙のまとまりや様々な表現の可能性を意識させることができた。

【課　題】

・　小学校との接続により，中学校英語への接続が滑らかになった一方で，中学校での各学年間での接続を工夫する必要もある。

・　小学校，中学校間での情報交換の場を意識的・継続的に設定し，交流をしていく必要がある。

### (2) 実践授業（３年生）

【成　果】

・　コロケーションを意識した形も提示しながら新出語彙の導入を行ったことで語と語のつながりを意識させながら指導を行うことができた。

・　デジタル教科書や文字だけではなくスライド等の視覚的な資料を効果的に活用することで生徒の内容理解につながった。

・　インフォメーション・ギャップを活用した言語活動を取り入れたことで，生徒が主体的な態度で取り組むことができた。

【課　題】

・ 既習事項を活用して表現しようとする生徒が増えたが，その表現の適切さや正確さには課題が残る。

・ 生徒が協力しながら互いに学び合えるようにさらに学習形態等を工夫していく必要がある。

## 8　おわりに

多忙な日常業務において，小・中の連携の時間を創出することは難しい。しかし，小学校英語活動，中学校英語科の学習内容や成果，課題等を互いに理解し，小学校で育った態度や技能を中学校での英語教育に繋ぎ，さらに伸ばしていくような取り組みがなされなければ，英語教育における子供たちの成長は期待できない。まずは，校区内の小・中の教員が声を掛け合い，協力していける人間関係を作る機会を増やして密度の濃い連携を図っていく必要がある。

### 引用文献


・　文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説　外国語編』開隆堂

・　文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』　東洋館出版社

・　大喜多喜夫（2004）『英語教員のための授業活動とその分析』昭和堂

・　小寺茂明・吉田晴世編著（2008）『スペシャリストによる英語教育の理論と応用』大修館書店

・　大井恭子・田畑光義・松井孝志編著（2008）『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店

・　影浦攻編著（2010）『完全実施で知っておきたい指導法＆実践案』　明治図書

・　影浦攻編著（2010）『改訂英語科新授業の実践モデル20』　明治図書

・　白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則（2009）『改訂版　英語教育用語辞典』大修館書店

・　樋口晶彦・島谷浩編著（2007）『21世紀の英語科教育』　開隆堂出版

・　平田和人編著（2008）『中学校学習指導要領の展開　外国語科英語編』明治図書

・　三浦省五・深澤清治編著（2009）『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』ミネルヴァ書房

・　村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店